

## オーストラリアの中学・高校における日本語教育実践

## —学生たちとの信頼関係づくりの重要性—

小野 萌子

## 要 旨

筆者は2016年4月～2017年3月の1年間、早稲田中学校・高等学校の協定校であるオーストラリアの Melbourne Grammar School に派遣された。ティーチング・アシスタントとして勤務し、授業補助や VCE の主に会話試験の練習、クイズ・教材・掲示物の作成、遠足や日本語に関するイベントの引率、試験やクイズの採点や評価など、様々な経験をした。現地の先生に行ったインタビューをもとに、学生たちとの信頼関係づくりや本プログラムの重要性について、仕事内容と併せて報告する。

## キーワード

オーストラリアの日本語教育 Melbourne Grammar School ティーチング・アシスタント 信頼関係 コミュニケーション

## 1. MGS の日本語教育の概要

Melbourne Grammar School (以下、MGS) は、1858 年に設立された私立の小中高一貫校で、ヴィクトリア州内屈指の進学校である。中学・高校は男子校でメルボルンの高級住宅街と言われているサウスヤラ地区の植物園の向かい側にある。小学校は男女共学で Grimwade House と言い、中高から 7km 離れたコーフィールド・サウス地区にある。Senior School (高校) の生徒数は約 800 名、Wadhurst (中学) は約 350 名で、うち、日本語を勉強している Senior School の生徒数は約 80 名、Wadhurst は約 70 名である (筆者派遣時)。

筆者が使用していた職員室は Senior School の LOTE 部門で、日本語の他にラテン語、フランス語、中国語の教員がおり、室内は様々な言語が飛び交っていた。日本語学科の先生方について、筆者が派遣された初めの 3 学期間は、Senior School ではオーストラリア人の先生 2 人が担当されていた。その後はオーストラリア人の学科主任の先生 1 人と、中国人の先生 1 人となっている。また、Wadhurst では休職中の先生の代わりに、台湾人の先生が受け持ち、最後の 1 学期間は休職していた日本人の先生が復職された。

Senior School の 9、10 年生だけでなく、2 年前から Wadhurst でも日本語の選択が可能になった。7～10 年生は言語科目が選択必修だが、11、12 年生は自ら希望して勉強を続けるため、意欲的に学ぶ生徒が多い。旅行などで幼少期から日本や日本文化に既に慣れ親しんでいる学生や、街中に日本製品の店や日本食レストランが多数あるため、それがきっかけで日本に興味を持つ学生もいる。また、日本の漫画やアニメを好きになったことで日

本語の勉強を始める学生も多い。12年生はVCE (Victoria Certificate of Education) で「特別研究」をする必要があり、その準備のために漫画やアニメについて各自で作成した質問項目を用いて、交換留学プログラムに参加している早稲田高等学校の学生にインタビューを行った。

## 2. TAの仕事内容

筆者はティーチング・アシスタント (以下 TA) として全クラスの日本語学習補助を行った。学生の人数・クラス編成は学期ごとに変動があるが、Wadhurst にて7年生2クラスと8年生2クラス、Senior School にて9年生2クラスと10年生2クラス、11年生1クラス、12年生1クラスを主に担当した。7年生は日本で言う中学1年生、12年生は高校3年生にあたる。指定教材として、まず Obento Deluxe と Obento Supreme、続いて11年生の中ごろから Wakatta を用い、これらに付随する Workbook も用いた。

Senior School での仕事内容は、授業内補助、VCE の会話試験のための個別会話練習、寮でのチューター、試験・クイズ・教材作成や補助、リスニングスクリプトの作成・録音、成績表作成、掲示物の作成 (図1参照) や貼り替えなどを行った。また、遠足や課外活動があるときには学生を引率した。

Wadhurst では、授業中フラッシュカードでひらがなの説明や復習をしたり、ホワイトボードを使用して日付や数字の読み方・書き方の練習、テストの採点や個別会話練習などをしたりと、多岐に亘る仕事を任された。遠足や課外活動の引率、ワークショップ (図2参照) の補助なども行った。

寮でのチューターは、週に1度、希望者を集めて、補習授業や宿題の補助、会話の練習など学生の日本語能力やニーズに合わせて運営した。

TAとしての勤務は、月曜から金曜まで1日5、6コマであった。上記の日本語学科での仕事に加えて、学校全体の研修や会議、学校集会、その他イベントなど、他の教職員と同様に参加した。

様々な課外活動を引率したが、モナシュ大学で行い、印象的だった2例を挙げる。“Why learn Japanese?” という9年生向けのイベントがあり、学生たちは、日本語を学ぶ意義についての英語のスピーチやどのように学習をしたかなどの経験談を聞いたり、和太鼓、空手、阿波踊り、浴衣の着付けなどのワークショップに参加したりした。普段日本文化に触れる機会のない学生にとって、このような体験は貴重であり、積極的に取り組んでいた。また、12年生向けにVCE試験についての説明会があり、解き方のヒントのプレゼンテーションや会



図1 筆者作成の漢字ポスター



図2 和太鼓ワークショップ

話試験のデモンストレーションを見に行った。デモンストレーションでは大学生が良い例と悪い例をステージで見せ、会場の笑いを誘っていた。配布された冊子の練習問題を会場全体で解き、答え合わせもした。その後は、VCE 試験を終えてからも、大学などで日本語の勉強を続けることの大切さについて、先生方からお話があった。MGS の 12 年生はほぼ全員日本語を続けたいと言っているため、高校卒業後もぜひ日本語を勉強してほしい。

### 3. VCE 試験と会話練習

MGS の日本語学科は、日本語でのコミュニケーションを重視している。12 年生は VCE の会話試験があるので、1 週間に少なくとも 1 回、45 分～80 分間日本語の授業時間外（空きコマの時間）に、筆者と個別で会話練習を行う。学生の会話能力は 1 人 1 人異なるが、それぞれに学びがあるよう工夫し、時間を有効に活用した。初めは挨拶や VCE 試験用の会話練習シートにある定型問題の受け答えを練習する。ある程度慣れてきたら、より詳しく質問したり、共感を示したり、自分の考えや感情を表現したりして、単なる「試験練習」ではない、その場で作る「コミュニケーション」を目指して練習した。12 年生のみならず 9～11 年生とも、学生 1 人 1 人とのやりとりを大切に、その時間を私自身も楽しむようにしていた。また、話しながら、学生が知らなかった語や表現を日本語と英語でノートにメモし、会話練習終了時に 1 部は学生に、1 部はメインティーチャーに渡し、もう 1 部は筆者が管理して、次の練習に役立てられるようにした。

このような練習方法の良い点は、コミュニケーションを通して人間関係が築ける点である。実際に、学校は職員の入れ替わりが多くあり、任期の関係で 1 学期間教えてすぐに去る教員もいた。アシスタントも同様に、学生からすれば「1 年しか教えない先生」であり、英語ネイティブの先生に比べれば英語力や教師歴も足りず、信頼してもらえる可能性が低いのではないかと感じていたため、学生との関係を築くことを目標とした。自信を持って教えること、学生 1 人 1 人の顔と名前を覚えること、学生の趣味や興味のある分野を把握すること、英語でも日本語でも挨拶や日常会話すること、そして会話練習の時にはなるべく日本語を使い、ノートを参照し、前回よりも言えるようになった語や表現があれば必ず褒めることなどに気をつけながら、コミュニケーションをとった。

学生は、会話練習を通して日本語での表現力が上がり、筆者に積極的に話をしてくれるようになった。たとえ学生がうまく表現できなくても、「練習なのでいくらでも間違えて良い」「間違えたからといって成績が悪くなるわけではない」といつも伝えていたからか、初めは間違えることを極度に恐れていたある学生も、日々の出来事や面白かったことなどを伝えてくれるようになった。また、多くの学生は、授業中わからないことがあると積極的に質問してくれた。学期末アンケートでは筆者との会話練習の満足度が非常に高く、楽しんで学んでくれたことが明らかになった。

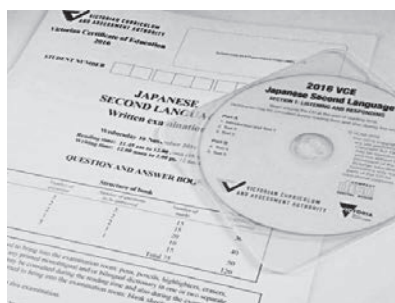


図 3 VCE 試験問題とディスク

#### 4. 信頼関係づくりの重要性—教員インタビューから—

欧米の学生は人を地位で見るのではなく、その人自身として見る傾向があると言われていたが、それを実感した1年間であった。授業運営は教師だけのものではなく、また、学生だけのものでもなく、教師と学生間の信頼関係によって成り立つのだと考えさせられた。学科の先生方とよく話し合っていたのは9、10年生の授業の困難さについてである。9、10年生は選択必修なので、自主的に日本語を勉強することを選んだ11、12年生に比べ、モチベーションが低い学生が一定数在籍している。その学生が他の学生に悪影響を与えてしまい、モチベーションが高かった学生も、次第に意欲をなくしてしまうことがある。また、教師の入れ替わりが多いことにより信頼関係が築きづらかったり、1クラスに入る学生数が多いことが原因で学生1人1人をきめ細かく見ることが難しくなったりするのも問題である。こういった問題をどう解決すべきなのか、学科主任の先生にインタビューをしたところ、やはり学生たちとの「信頼関係」が重要だという。

「他者を敬う」ということが教えられるように気を付けています。無礼なふるまいをして、授業中、周りにリスペクトがないなら注意します。でも、ただその学生を注意するのではなく、私もその学生とよくコミュニケーションをとります。もしその学生があるスポーツが好きでクラブに入っていて、土日に試合があるなら、私は応援に行きます。普段からコミュニケーションをとって、私はあなたを気にかけていますということを表します。そうするとすごく関係がよくなるし、相談してくれるようになります。会った時に日本語でちょっとだけ声をかけてみたりして、その学生が答えて、その学生の家族や友人も周りにいてそれを見ていたら、学生がすごい、きちんと勉強している、ということをアピールできます。私も学生をリスペクトして、学生も私をリスペクトして、そうすれば授業も来るし勉強もするようになりますから、そういう関係づくりが一番大事です。でもそうすると、学生が卒業していくのが本当に寂しい……。

このように、学生であっても教師であっても他者を敬うことが大切で、信頼関係を築くことができれば授業もスムーズになり、学生は日本や日本語について、より深く学ぶようになると語っている。では、先生がコミュニケーションをとることの大切さを実感した経緯はなんだろうか。以下のように語っている。

私は、実は日本に行く前は日本語があまりできなかったです。勉強はしたけど、話すことはそんなにすることがなかったから自信が全然なくて。だからはじめは大変で、でも日本に行ってから色々な人と出会って、すごく勉強になった。みんな親切で、日本語もできるようになってきて、自信もついて、本当にいい経験でした。だから、日本にも日本人にもすごく感謝していて、今、日本語を教えるのがすごく楽しいです。学生にも、だからやっぱり一番は、コミュニケーションがとれるようになってほしいです。そのためにはアシスタントはとても必要です。日本人と話して、でも普通の日本人と話すのはハードルが高いですから、アシスタントと毎日毎日少しずつ練習するのが大事だと思います。日本語を勉

強すること、異文化を理解することは、やっぱり若いうちからやってほしいから、高校生で日本語を勉強して、日本に行ったりしてみしてほしいです。そういう、これからの可能性があることをしている、と思っています。

先生は日本での経験からコミュニケーションの大切さを実感しており、その力を学生たちにもぜひ伸ばしてほしいという強い思いで日本語を教えている。そのために TA は重要な存在であり、今後も TA と共にコミュニケーション教育を発展させたい考えである。

## 5. おわりに

今回、MGS に 1 年間派遣され、学生だけでなく先生方ともコミュニケーションをとり、信頼していただけたことで、アシスタントとしての自分自身の存在意義をより理解することができたと感じている。

本プログラムの良かった点は、様々な内容の仕事を任せていただけたことだ。私は海外で 1 年間通して仕事をしてみたいと前々から思っていた。はじめは緊張して戸惑うこともあったが、先生方に頼られ、意見を求められたり、授業に際し私に色々な経験をさせてくださったり、学ぶことが多く毎日とても充実していた。学生に感謝されたり、頼られたり、良い先生だと言われたりすることもあった。このように、コミュニケーションを通して人間関係が築けると楽しく、日本語を教えるモチベーションにつながった。また、本プログラムにおいて日本語の TA は 1 年につき 1 人のみ派遣されるので、試行錯誤しながら、自分なりに自由にアイデアを出すことができたのも良かったと思う。

MGS の学生たちの日本語能力を伸ばせることだけでなく、日本や日本語をもっと好きになってもらえることがこの上ない喜びだと感じ、本プログラムの更なる発展を願う。



図 3 Senior School のホール

## 参考文献

- 船山久美・宮崎七湖 (2003) 「アシスタントを導入した短期留学生のための日本語プログラム—第 1 回早稲田高校／メルボルン・グラマー・スクール交換留学プログラムより—」『早稲田大学日本語教育研究』3、pp.85-97
- 岡山結花 (2007) 「オーストラリア・ヴィクトリア州における日本語教育の現状」『摂南大学教育学研究』3、pp.77-90

(おの もえこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了)